

再任用・再雇用職員・非常勤教員部ニュース

No. 326
2019.11.20

東京都公立学校教職員組合（東京教組）

再任用・再雇用職員・非常勤教員部

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 2F

TEL. 03-5276-1311 FAX. 03-5276-1312

再任用・再雇用職員・非常勤教員部

秋の交流会 池上本門寺を訪ねて



11月9日(土) 部会交流会が大田区池上で行われました。穏やかに晴れわたった秋空のもと、懐かしいお顔のOG・OBと現役合わせて11名が参加となりました。池上線池上駅に降りると、講師をお願いした森谷さんが改札口で待っていてくださいました。

大田区という東京の玄関口ともいべき土地ながら、訪れる機会のすくない者には、ほとんどが「初～」という「初めて尽くしの交流会」でした。

駅から歩きはじめると、さっそく名物のくずもち」のお店。「久寿餅」と縁起をかついだ文字を用いて暖簾が出ています。寺院の門前にできた町ならではの家並びです。大きな門を過ぎいよいよ本門寺の境内です。加藤清正がしつらえたという長い階段もしっかりあります。途中の踊り場が2か所ありますが100段もあろうかと思われる「高み」へ上がる階段です。足腰の健康維持にはもってこいの場所でしょう。

池上本門寺は日蓮宗の寺院で、多くの伽藍（がらん＝建物）を持ち、本堂や経蔵、五重塔など、すぐ名前が浮かぶ建物のほか、仁王像のある「三門(この寺では『山』ではなく、『三』の文字を用いるそうだ)」「大堂＝(上野と芝にある寺のお堂と比較して、池上の大堂とよばれた)」「日朝堂＝(日朝聖人にちなんだ)」など、それぞれ謂れに沿った名がつけられた建物もあります。いつもの交流会では、町並みを歩いての散策でしたが、今回は塔頭を含めての寺の中だけの散策です。「本行寺」と別名で呼ばれる日蓮上人が入滅(死亡)した場所に建てられたお寺の部屋中にまで入って見学したり、聖人を茶毘に付した場所である「多宝塔」にも立ち寄りたりしました。「五重の塔」と少し色づいた紅葉をバックに記念撮影をしたり、著名人の墓所を見るなどしたりして散策を終えました。



昼食会は電車に乗って蒲田までおもむき、美味しい中華料理の円卓を囲んで、参加者みなさんのお話を聞きながら、平和と教育の大切さを改めて感じる『交流会』となりました。

恒例の交流会に参加した。**部長 鈴木 達哉**

今回訪ねた池上本門寺は、日蓮宗の大本山というだけあって、広い境内に様々な建物があり、一回りするだけ、1日のノルマにしている歩数を軽く超えるほどだった。

普段は、全く無宗教な生活なのだが、1月ほど前に、長い介護生活を過ごした母を見送ったばかりで、葬儀や納骨などで久しぶりに行った田舎の古寺と、規模の差などを感じながら見学して歩いた。歩きながら、参加された方々が、宗教の広がりや宗派の成立、寺と神社の関係、権力とのつながりなどについて所々で話されるのを聞いてなるほどと思うことばかりだった。

小春日和の、暖かい日差しの中、登りの階段はきつかったが、楽しく歩けた歴史散歩だった。丁寧な冊子を作り、案内して下さった森谷さんに感謝したい。

**「にわか勉強」の成果…****講師 森谷 憲光（大田）**

日蓮については、ほとんど予備知識が無く、秋の交流会が「池上本門寺の散策」と決まってから、正直悩む毎日でした。仕方なく、インターネットの池上本門寺のホームページを開いて、にわか勉強と相成りました。でも良い勉強になりました。

今回の交流会のガイドブックを作るにあたり、実踏を行い「散策コース」を決めました。一般の人にはあまり知られていない、「多宝塔（日蓮聖人御茶毘所）」と大坊本行寺の「御臨終之間」を皆さんに是非紹介したいと思い、やや強行なスケジュールでしたが、ご案内させていただきました。

これほど大きいとは**浅川 謙司（港）**

よく晴れて、散歩、見学に向いた1日でした。池上本門寺がこれほど大きいとは知りませんでした。だいぶ前に訪れた記憶があるのですが、その時は一部だったのです。

境内の建物について、地元大田の森谷さんに事前調査をしてパンフレットも作って、案内いただきました。焼失、再建したところが多かったのですが、とても大きい。時代を担った方、事業を成した方のお墓が沢山ありました。

七五三詣りの家族連れが沢山いました。案内ありがとうございました。恒例の交流会も楽しみました。

読んだ小説を思い出しながら**牧元 啓子（大田）**

好天に恵まれ、気持ちよく本門寺散策を楽しみました。大田在住なので、何度か本門寺は訪れた事がありますが、多宝塔や本行寺は初めてでした。

帯木蓬生の小説「襲来」で日蓮とその弟子の見助が、蒙古襲来の時代の世で、どう生きたか

を読んだ後だったので、思い出しながら回りました。

昼食会での皆さんの戦争体験のお話や、今の学校の問題点などを聞くことが出来、有意義でした。詳しい資料もいただき、とても勉強になりました。ありがとうございました。

何と広い寺域！

飛田 邦子（江戸川）

11月9日、大田の森谷さんのご案内で池上本門寺境内を散策しました。わたしはこれまで本門寺を訪れたことがなく、日蓮宗開祖の日蓮上人が亡くなられた地であることを初めて知りました。総門、仁王門、大堂、本殿、多宝塔、五重塔と階段を何段も上ったり、下ったり…。それにしても何と広い寺域・立派な寺院なのでしょう。結構体力を必要とする行程でした。後世「徳川家などの庇護を得て、ますます発展した」（パンフレット）ことが頷けます。上人ご臨終の大坊本行寺ではお寺の中まで入らせていただきました。墓地では力道山の墓を見学。ほかにも著名人・有名人の墓が多数あるそうです。

昼食・交流会では学童疎開された柴田さんや当時は赤ちゃんだった浅川さんが、戦争中・終戦直後の食糧状況や空襲の様子等の体験に基づいた貴重な話をしてくださり、一同聞き入りました。鎌倉時代から昭和の戦争の時代まで思いを巡らし、学びの大切さに気づかされた一日でした。講師の森谷さんをはじめご参加の皆様、ありがとうございました。



都教委、日勤講師（非常勤教員）の取扱いに関する要綱を一部改正

「副校長補佐」は削除、「若手教員の指導育成」に重点

都教委は10月7日、「都立学校等に勤務する日勤講師の取扱いに関する要綱の一部改正について（通知）」を、9日に「非常勤教員の活用について（通知）」を続けて発出しました。来年度から会計年度任用職員制度が施行され、非常勤教員もこの制度に移行するので、非常勤教員の役割を見直し、若手教員（新規採用後、主任教諭選考の受験資格を得るまでの間にある者）の育成支援を中心として職務内容を整理するというものです。

通知によると、任用区分からB区分（教育アドバイザー：主に管理職）が廃止になり、任用区分は、A（教員）、C（養護）、D（管理職）、E（栄養）の4つになりました。全ての任用

区分で、若手教員の育成支援が明記され、主な職務内容の例示が変更されています。変更された職務内容を見ると、非常勤教員の負担が増す恐れのあるものが、いくつも見られます。

教員が選考対象のA区分の場合、区分名称が従来の「副校長補佐等」から「若手教員の育成支援等（学習・教科指導等）」に変更になりました。主な職務内容は、従来あった「副校長の補佐業務」「小学校学級担任補助」「小1問題等対応」等がなくなり、従来からあった「学習・教科指導」「配慮が必要な児童・生徒への対応」等に加えて、「校務分掌業務の補助及び支援」「学校行事等の運営支援」「巡回指導による初任者等対応業務（小学校に限る）」等が付け加えられました。

A区分で新しく付け加えられた「巡回指導による初任者対応業務」は、従来B区分で行われていましたが、B区分の廃止で、A、D区分に振り分けられました。この業務は小学校に限られ、「初任者の配置校に非常勤教員を配置し、校内の初任者への対応を行うとともに、同一地区内の初任者が配置されている学校を巡回指導し、各校における課題に対応する」というものです。配置校に限らず複数校で、若手教員の指導をすることは大きな負担増です。

また、「校務分掌業務」では、「原則として校務分掌業務を割り当てるものとする」とされ、自らも担当業務を処理しながら若手教員に、校務分掌の効率的な処理に係るノウハウを伝承する、とか、「学校行事等の運営支援」では、若手教員に対して運営に係るノウハウを継承するものとする等、若手教員の指導を全校体制ではなく、非常勤教員まかせしようとしているのではないか思えないものがいくつも見られます。

さらに、「その他校長が命じる業務」は残り、「人材育成又は育成支援に伴い発生する業務」「休暇や欠員等の緊急時対応 等」と、校内でどんな仕事をさせられるのか分からず不安になるような内容です。相変わらず「学習・教科指導の持ち時数は11時を標準（Ⅱ型は8時）とする」としていますが、小学校は除かれています。

会計年度任用職員制度の導入は、非常勤で勤務する地方公務員の処遇改善が目的です。今回の要綱の変更は、若手教員の育成という学校現場の課題を安易に非常勤教員に担わせようとしているだけではないでしょうか。

信州平和1泊2日の旅

顧問 城田 純生（多摩）

7月ごろから、満蒙開拓団の記念館に行こうか？という話があって、8月はどうにも都合がつかず、9月になってしまった。目的地は上田市の無言館、長野市の松代大本営地下壕跡、飯田市の満蒙開拓団記念館の3つだ。参加者は私とイロハネットの4人で計5人だ。

9月18日（水）。関越自動車道は平日のためか渋滞もなく順調に進んだ。藤岡JCTから上信越自動車道に入る。天気はまずまずである。上田菅平ICで高速を下りて、無言館の下の駐車場にたどり着く。大きなコンクリート造りの建物があつた。[無言館]らしい。

入口から入ると、この美術館を創設した窪島誠一郎氏のコメントが掲示され、この美術館開設の趣旨が読み取れる。正式名称は「戦没画学生慰霊美術館」というそうだ。日中戦争、太平洋戦争で亡くなった画学生の残っていた作品が壁面に飾られていた。個々の作品の制作者は現在の芸大卒業生や多摩美や武蔵野美の卒業生が多い。その多くは21歳から27、8歳の若者

だ。戦死したり、戦病死したりした若者たちであった。彼らの最期の場所も中国大陆や太平洋上の島々である。作品の多くは恋人や妻の姿を描いた像や故郷の風景を描いたものである。油絵であったり、日本画であったりするが歳月がたっていて、作品の傷みも進んでいた。作品の他に画材道具や、故郷の親族や知人にあてたはがきや手紙もあった。私の印象に残った作品は日本画で妻を描いた大きなサイズの作品だった。

訪れて感じたことだが、戦場で散っていった尊い・かけがえのない若者の命・平和の尊さを今の時代を生きる人々に伝えることが何よりも価値あるものと言えるが、一方で、アジア太平洋でこの戦争で犠牲になった人々、とりわけ中国や韓国・朝鮮の人々がこの作品を見たとき、どのような思いをするのだろうか、そのことが気にかかる美術館であった。

次に、長野市の松代大本営地下壕に向かう。IC から目的地に向かうが、何度ナビに住所を入力しても受け付けない。ほかの人が調べてみると、電話番号が一文字違っていた。道理でと気を取り直して入力してみると、きちんとヒットした。しかしそこはもう一つの「歴史館」というところで、狭い場所にいくつかの展示物がならんでいる。ともかく地下壕に入ってから、後でその歴史館で話を聞くことにして、地下壕へと歩を進めた。

松代大本営地下壕は、舞鶴山(まいづるやま) (現気象庁松代地震観測所) を中心として、皆神山(みなかみやま)、象山(ぞうざん)に基盤の目のように掘り抜かれ、その延長は約 10 キロメートル余りに及んでいます。

ここは地質学的にも堅い岩盤地帯であるばかりでなく、海岸線からも遠く、川中島合戦の古戦場として知られている要害の地です。

第二次世界大戦の末期、軍部が本土決戦の最後の拠点として、極秘のうちに、大本営、政府各省等をこの地に移すという計画のもとに、昭和 19 年 11 月 11 日から翌 20 年 8 月 15 日の終戦の日まで、およそ 9 箇月の間に建設されたもので、突貫工事をもって、全工程の約 8 割が完成しました。

この建設には、当時の金額で 1 億円とも 2 億円ともいわれる巨費が投じられ、また、労働者として多くの朝鮮や日本の人々が強制的に動員されたと言われています。

なお、このことについては、当時の関係資料が残されていないこともあり、必ずしも全てが強制的ではなかったなど、様々な見解があります。(長野市ホームページより)

入り口でヘルメットをかぶって入場するように指示があり、それに従って地下壕に入っていた。薄暗い地下壕は自動車が 1 台入れるぐらいの幅ではあるが、天井が低い。身長の高い人だと頭がつかえるような高さだった。壕の左右の壁の上部に電灯が灯っていて、中はそれほど暗くない。しかし、下は岩や石や土ででこぼこがあり、歩きにくい。壁をよく見ると削岩機で穴を開けた跡があり、確かに人の手や簡単な機械で掘り進んだのだと思わせる跡がある。いわゆる素掘りというものだ。ところどころ落盤が起きないように鉄骨で補強した箇所がある。

暫く進むと、20 人前後の団体が女性ガイドの説明を聞いていた。少しの間、話を聞いて、奥まで進み、また引き返してきた。

もう一つの歴史館に行く。松代大本営地下壕とは太平洋戦争末期に本土決戦に備えるために軍部が計画し建設された指揮中枢のためのシェルターである。計画の 75 パーセントまで建設

され、8月15日を迎えたそうだ。歴史館ではボランティアの男性から丁寧な説明を聞き、今考えてみれば荒唐無稽なものだが、当時は真面目にこのようなことを考えていたようである。

9月19日（木）

今日の予定は飯田市にある満蒙開拓団平和記念館である。長野からは160kmもある。同じ県内ではあるが少し距離がある。運転している途中で、空がすっきり晴れてきて太陽が眩しい。記念館に到着した。

記念館では、ボランティアの方が長野県からたくさんの「満蒙開拓団」が参加したことや、当時の日本の置かれていた経済状況や中国に侵略していった軍部の様子等を説明してくれた。早口なので理解が追い付かないところもあったが、「満蒙開拓団」の全体像は何となくわかった。

国内送出のうち33000人と最も多かったのが長野県である。それは、行政や教育界の指導者層の中に満蒙開拓推進論者が多かったのも理由の1つだそうだ。理由のもう1つは、当時は、「産めよ増やせよ」の時代で子どもが10人いれば表彰される時代でもあった。しかし、子どもに分け与える田畑がない中で「満州に行けば20町歩の大地主になれる」という誘い文句は農家の次男、三男坊には大きな魅力であったそうだ。大きな希望を抱きながら行った開拓団であったが未開の辺境の地を切り開くよりも、「満蒙開拓」の多くは現地の中国人の農地や家を半強制的に「買い上げ」等をし、これを追い出し「行ってみたら、そこには家も畑もあった。」という入植形態が多かったそうだ。当然、現地の中国人等からの恨みを買うことになっただろう。

戦争末期の昭和20年春のころには、入植者を守るはずの軍隊=関東軍は、戦略上の理由からといち早く後方に退き、前線には日本軍はいなかったそうだ。しかもその「転進」時（退却とは言わなかったそうだ）には敵にそのことを悟られないようにと開拓団にも知らせず、それどころか敵の追撃を防ぐため鉄道や鉄橋まで爆破していった。守るべき軍隊も無く、逃げるべき鉄道も鉄橋も破壊され、女、子ども、老人ばかりの開拓団の逃避行は悲惨そのものであり、「生きて虜囚の辱めを受けず」との戦前教育のもと、集団自決を選ぶ開拓団も少なくなかったそうである。

ネトウヨがバッコするこのごろであるが、安倍政権は、自衛隊は敵から国民を守るという。憲法9条を改悪し戦争のできる国づくりに邁進する安倍政権。行き着く先がこのような悲劇をもたらす結果になってはいけない。嫌韓を煽り、支持率を高める安倍自民党。こんな自民党には負けられない。僕らはあくまでも平和を希求する。軍隊は国民を守らないことは沖縄で知らされた。満蒙開拓団の歴史からも同じことが言える。二度と同じ悲劇を繰り返してはならない。強く感じた1泊2日の平和の旅であった。

再任用・再雇用職員・非常勤教員部 これからの予定

12月4日（水）	15:00	常任委員会
1月15日（水）	15:00	常任委員会
2月5日（水）	15:00	常任委員会
3月4日（水）	15:00	常任委員会